

物語村木源次郎

鈴木清順

「えらいことになったね……。」言葉にも何もなっちゃいないと村木源次郎は思った。

キリストらしい男が、伊豆天城の猫越峠で凍死したという新聞記事を見て、カーツとなって本郷駒込片町の労働運動社に帰って来た村木が、これも一大事とばかり幸徳事件記念集会に集っている同志に知らせようと、社を飛び出た近藤憲二と出会いがしらにぶつかって吐いた言葉がそれだ。

キリストらしい男というのは、北風会の久板卯之助のことだ。久板はその風貌も人格もキリストそっくりだったので、みんなからキリスト、キリストと呼ばれていた。

「えらいことになった……。」何か云わなければ気が落ち付かない村木は、も一度同じことを口走った。

村木が第二次「近代思想」以後の大杉栄についてゆけなくなり、本郷白山の渡辺政太郎の研究会に入りするようになったのが、大正四、五年のことで、渡辺が大正七年に死ぬと、渡辺の志を継いで、久板と共に作り上げたのが、北風会である。

その北風会が、劇しい冬の風のおふりを喰らった訳でもないのに、眼が醒めてみると壊れていたという呆気ないつづれ方を、「えらいこと」と云わざるを得ない村木の気持に、近藤は同情した。事実久板を失っては、北風会を支える器量が村木にはなかったのである。しかし村木

の気持は近藤とはまるで違っていた。

その日が一月二十四日という厭な符節だった。十一年前の明治四十四年一月二十四日、幸徳秋水が市ヶ谷監獄で縊られている。そして今日、大正十一年一月二十四日、キリストの死の知らせである。

二十四日はゲンの悪い日である。一月と云わず二月、三月も二十四日という日は、村木にとって何かと蹟きがある日だったので、主義者たちとの打合せ、会合、金銭の調達等、出来ることならその日は避けて通って来た。しかし幸徳事件の記念集会の日まで彼一存で変える訳にはいかなかった。堺利彦の提唱で始まったこの集会は、事件以後散り散りになった主義者たちが集まり、思いを新たにすると共に、お互いの消息やら運動状況を交換し合うのである。

今日の集会でキリストの顔が見えなかったので、消息通のある主義者が「幸徳の記念日に画筆を持って遊びに出掛けるなんて怪しからん。」と村木に突っかかって来た。

キリストは二、三年前から突然油絵に非常な情熱を打ち込み始め、あちこち写生に出歩くようになっていた。今度の写生行も村木は知っていた。出掛ける前、幸徳の記念日にぶつかることは承知のうえでキリストは「記念日なんて僕には関係がない。」と云い棄てて出掛けた。成程記念日ぐらい意義がありそうでは何の取得もない日はないから、村木も強いてキリストを止めなかったが、今考えると妙に引くかあることがある。

去年のクリスマスの頃、キリストと白山あたりを歩いていて、ふと村木は思い出し、大杉の魔子のためにささやかなプレゼントを買った。キリストは旁で見ていてニヤツと笑ったので村木は照れて「キリストを棄てたつもりでも、どこかでキリストが忘れられないんだな。」(村木は熱心な信者であった父の感化を受けて早くから横浜の海岸教会に属し、そこから社会主義者

に転じた)と云うと、キリストは「いや、あれは矢張り西洋の宗教なんだ。罪の意識がまるで違うんだ。頭ではそいつが分ったつもりになっていたが、どうやらそれは僕たちの過信だったらしい。皮膚が違うんだよ、血が違うんだよ、怖いなあ、歴史というか伝統というか……君は棄てたというが、もともとキリストなんて僕たちにはなかったんだ。本当に怖いよ、歴史とか伝統とかが創り出したものは……たまたま京都で同志社時代の牧師に会ったら、そ奴が云うんだ。フランス人だがね。祖国フランスのために、神につかえる身でありながらやむにやまれず銃をとり(第一次世界)大戦に参加した。敵は前から来るものと思って前進して行ったら、敵はうしろから来た。私はすぐ両手を挙げたってね。前から来たらどうする、と聞いたら、殺しますって答えた。これが僕たちキリスト者だったらどうする。僕はきつと手も挙げず、前から来た者には目をつぶり、殺すより殺される方がキリスト者らしい、と突っ走った考え方をして殺されたらうよ。それは僕が飽くまで分ったつもりになろうとするからだ。もともとないものを棄てるってのも可笑しなものだが、悪い具合に僕たちの頭の中には、分ったつもりのものが未だ残っていて、僕たちの運動にも邪魔になっているんだよ、君。」と、疲れ果てた表情で云った。

村木は、キリストが猫越峠で、うしろから来た敵に、万歳もせずに殺されたと思った。記念集会に出て幾百万遍の御託を並べ立てようと、市ヶ谷監獄で縊られた幸徳の精神の高みに到ることは到底出来ない、とキリストは信じていたに違いない。幸徳が死んでから十年にもなるのに、日本は少しも革まらず、世の中の苦しみと悲惨は果しく続いているというのに、行動らしい行動も起せず、これから先何年、仮りに劇的な行為の瞬間が来ても、分ったつもりのあの

罪の意識が頭をもたげて来る恐怖と、それに続く逡巡、結果としての卑怯未練に耐え兼ねて、敢えてキリストは、自分の魂を幸徳の霊に重ねようとしたのではないのか。そうでなかったら、一月二十四日を目やすに家を出た理由が分らない。キリストの死は遭難死ではなく自殺だ。うしろから来た敵は驚くかなれキリスト自身だったのだ。自分の心の中の敵にキリストは殺されたのだ。足まめに諸所方々を飛び歩いてた主義者としての情熱を、突然油断にふりむけたのは、自殺をすることによって、より燃焼度の高い、妖しい青白い焰のような主義への情熱に再び自分を蘇生させ、更に一月二十四日に重ねることで主義者への、あるいは世間への警鐘としたのではないのか。キリストの写生行は自殺の準備であり、ひそかに幸徳に殉ずる時と所とを探していたように村木には思えた。

「ウム……」村木は太い息をついた。近藤が「えっ？」とふりむき、「何か云ったかい。」と聞いた。村木は返辞もせず台所に行くと、冷たい水を一息に飲んだ。

村木は、落合火葬場で見えた幸徳の縊り殺された顔を思い浮かべた。

村木は少年時代から美男子だった。お役者小僧、お役者小僧と云われながら幸徳のために飛び廻っているうち赤旗事件に連座して、一年の懲役刑を受けると、当時流行りの、成長した主義者となっていた。幸徳たちの大逆事件の処刑が終わった時、彼は血気ざかりの二十一歳の青年だったが、流石事件のあと始末となると未だ貫禄不足で、堀や大杉、渡辺のまわりをうろちよるだけで、云わば足手まといの存在だった。幸徳の死体引きとりから火葬まで、官憲の干渉はまさに死屍に鞭打つと云った形容がぴったりするくらい非道いもので、その度毎に村

木の血はカッカと頭にのぼり、幾度か警官隊の群れに殴り込みを掛けてやろうと勇み立ったが、幸徳の死に顔を見るや、その勢いがすーっと萎えてしまった。

五分刈り頭の幸徳の顔が余りに静かだったからだ。

幸徳の顔が苦悶にゆがみ、眼をむき出して瞋っていたら、村木のその後の行動はもっと積極的な形をとっていたかも知れない。三十になるかならぬうちに、何も彼も呑み込み顔で主義者たちの相談相手になってやり、「御隠居さん」と渾名され、日なたぼっこをしながら、日がな一日煙草を吸ってくらす生活はしなかったかも知れない。それ程幸徳の死に顔が村木に与えた影響は、主義者たちに云わせれば、逆の方に働いてしまったのだ。

事実、彼は幸徳処刑のあとすぐ故郷の横浜に引込んで、牛乳配達や新聞配達をして暮している。成長株の主義者としては、東京こそが絵舞台である筈なのに、横浜に帰るなど考えられないことなのだが、村木にしてみれば、幸徳のあのあつからんとした死に顔に我慢が出来なかったのだ。生きている時の気魄や怒りを、殺されたあとあとも簡単に忘れ去っていいものだろうか。それは間違っていることなんだ。これが間違いないなら、あの幸徳の顔も間違っている。殺された幸徳の顔は、怨み骨髄に徹する態のもっとどろどろしたものがあるべきだ。

村木は真剣に幸徳の顔を作り変えようとした。

眉を逆立て、眼をむかし、鼻腔をふくらませ、口を「へ」の字に曲げ、大杉が後年その「獄中記」で云うところの、「屍骸で見た咽喉のまわりの広い紫色の帯のあと」を、極端に残酷に描いてみた。村木にとって、あらねばならぬ理想の幸徳の顔を丹念に描き切ってみると、その怒髪天を衝く幸徳の顔は、村木が最も嫌いなタイプの人間の顔になっていた。あれ程好きだった幸徳が、どうしてこうも醜くく変ってしまうのか、村木は口惜しさが余って泣いた。

村木が再び東京に戻ったのは、大杉が荒畑寒村と「近代思想」を創刊し、更にサンジカリズムの研究会を発足させて、いわゆる「冬の時代」にからくも虚無の灯をかかげた大正二、三年の頃で、特に研究会には橋浦時雄と共に精神的に動きまわっている。もちろん彼の上京には大杉の勧誘はあっただろうが、それ以上に彼の胸に、幸徳への止むに止まれぬ思慕の情が沸々と滾っていたように思える。彼の唯一の句である。

淋しさや秋の水追う蝶一つ

によっても、彼がいかに幸徳の死に顔を作り変えようが、彼は幸徳が好きで好きでたまらなかったのだ。一度好きになったら止めどもなく傾斜してゆくのが彼の特性で、死に顔が間違っていたからと云って、好きな奴とは死んでも付き合ひ度い、若し幸徳が地獄の闇に迷っているなら、提灯を持ってその道を照らしてやり度いくらいの愛情を村木は持っていた。そして幸徳のいない今、幸徳とつき合うためには、幸徳の主義とつき合う以外に方法はない。

好きな奴、厭な奴、これが村木の価値の規準であって、後年主義者の世話役として、誰とも愛想よくつき合った村木を、青年時代の彼から想像するのは困難である。

「どうかしましたか。」近藤が台所をのぞいて聞いた。

「え？……いや、何……。」村木は曖昧に答えながら、キリストの顔も幸徳と同じように静かなんだらうな、と想像した。

「久板さんは幾つでしたか。」重ねて近藤が聞いた。

「たしか四十五、四十六になったばかりだ。」

「渡辺さんが死んだのも四十六でしたね。」

「え？……。」村木は動転した。研究会——渡辺——久板（キリスト）——村木——北風会。最も近い線を忘れていたのだ。一人の死が二つの悲劇を内蔵している。一月二十四日と四十六歳とだ。キリストは渡辺以上に齢をとることを拒んだのだ。キリストの自殺は村木の心の中で決定的なものとなった。

「僕が始めて久板さんに会ったのは、久板さん自身ではなく、彼の部屋でした。例の渡辺さんの三角二階の一室を借りて住んでいましたが、僕が行った時丁度彼は留守で、部屋には机もなければ火鉢もなく、三枚の座蒲団にドテラが置いてあるだけでした。案内してくれた渡辺さんが、これが彼の全財産だ、と笑って話してくれました。僕はその三枚の座蒲団とドテラを見ただけですっかり彼と会った気持ちになってしまいました……。」近藤は村木にでもなく、自分にでもなくキリストを回想した。

翌早朝、村木は岩佐作太郎、望月桂と共に伊豆天城に出発しているが、これも近藤の「二無政府主義者の回想」は次のように云っている。

（久板卯之助は）伊豆の伊東から海岸づたいに南に下って、一月二十一日の夕刻、天城山の南麓宮ノ原に着いた。茶店の老婆が、もう夕刻でもあり雪もつもっていることだからとめたが、僕は雪が大好きですといって出たのである。猫越峠を越えて湯ヶ島から修善寺方面へ行くつもりだったらしい。が、彼の健脚がついに彼に禍いした。かくて峠の頂上で雪になやまされ、彼は倒れたのである。

三人が帰って来てからの話によると、二十二日午後、御料林の山番によって発見された彼の凍死体は、質朴な湯ヶ島村の人たち、しかも戸別から集った四十幾人の肩と手によって山から

おろされ、手あつく仮埋葬されていたのである。三人がゆくと、この親切な村人たちは、またもあちこちから集ってきて、彼を火葬にするための仕事に、寒い一夜をついやしてくれたいという。かくて久板さんは死んだ。四十六歳の童貞が雪の中に死んだのは、いかにも彼らしい美しい死に方であった。いや、それよりも、見知らぬ淳朴な人たちの手によって親切に葬られたことは、もっと彼にふさわしいものであったといった方がいであらう。

更に当の村木は、新聞「労働運動」での「久板君追悼」のなかで、「湯ヶ島の村役場では君の遺品を見た。そこから山をたどって一里半、いま眼前に君の死の姿を見る。されど、ことさらに驚きも嘆きもおこらない。現制度の矛盾残虐を憤り、世の苦しみへ倦きはてたお互いは、何如にして死にぶつかろうと、いつも死の方法や、時と所とを考えさせられている。いま僕の頭には、君の平和な面影に接して、ただ羨望の感にたえないのだ」と書いている。

近藤の「回想」はさて置き、村木の「追悼」は追悼文というより、劇しく死の幻想にとり憑かれた村木自身の心情の告白書である。キリストの死を見た数行の文章の中に、淋しい、淋しかったろう、残念だ、残念だったろう、ふさわしい死、らしい死に方、と云ったキリストの心情につながる詠歎的な言葉を村木は一つも使っていない。キリストの死の姿に、ことさらに驚きも嘆きもせず、平和な（果してキリストの死は平和だったろうか）面影（果してキリストの死に顔を云っているのだろうか）に接し、ただ羨望の感にたえない、と一途に死という現実を羨やましがり、死を観念している。キリストの死の報に接し、キリストの死の実際を見、追悼の辞を書くに至る此の短い時間の推移の中で、村木が他人の死を自分の死に変えていったのは一体何なのだろうか。

書かない、云わない、働かない村木が、主義者としての自分の立場を、やり切れないように歌った詩がある。

夏のお陽さま カンカン照らす

ぼくは汗だく埃にまみれ

赤い煉瓦のおうちを指して

ひとりよぼよ御本を運ぶ

夏のお陽さま カンカン照らす

赤い煉瓦のおうちとは監獄のことであり、御本を運ぶとは差し入れに本を運んでいる村木の姿であるが、そんな村木に対し主義者たちは、文章も書けず宣伝は不得手、実際運動には参加せず、かてて病身、主義者の無用者とききおろすが、大杉独り、村木には村木相当の仕事がある、黙ってみていたまえ、と庇うのである。悪く勘ぐれば、大杉も他の主義者同様村木に何の希望もかけた訳ではないが、万一大杉が幸徳と同じ運命をたどる時、家族の世話ぐらい彼がするだろうと、青年時代の村木の感激性と俠気を当にし、村木に聞こえよがしの庇い方をしたのかも知れない。事実此の話を聞いた村木は涙を流さんばかり感激している、が而し大杉の当も当にならず、後年大杉が甘粕大尉に虐殺された時、既に村木は自分の死を自分の中にとり込んでいて、大杉の死を踏み台に自分の死を完結している。とにかく此の頃の村木は、彼独特の好悪の価値判断を捨て、八方美人的に誰にでも愛想よく、主義者の中で安穩に安全に自分の座を占めていたが、それ丈に一更腑抜けた存在でもあった訳だ。もちろん此の間ずっと彼が落ち付き済ませていた訳ではない。大正七年、彼は宿痼の肝臓が悪化して、本郷台町の延島英一母子の家で殆んど死にかけていた。見舞に馳けつけた和田久太郎に、彼は押入れから一つの風呂敷包

を出させた。和田が開いて見ると、紋付の衣類と六尺の晒が一本と、短刀が一振り現われた。「これが僕らの精神で、そして死装束だ。病気で死にたくないと思ってる！」

と和田に云っている。畳の上で死ぬ主義者の見えすいた常套的な強がり、に喰わぬ文句だが、村木が死にたくないと思ったのは本音だろう。やり度いことは生きているうちにやればいいのであって、死に損ないがやり残したことをやり遂げることは万が一にもないのである。今度の戦争で死の覚悟をして出撃した特攻隊員が、不時着したり、機の故障で基地に帰って来ると、当時の軍隊でさえ、その男を二度と特攻隊員として出撃させなかったという。それ程二度目の死ぬ気は難かしいのである。それから大正十年頃、村木は社会主義弾圧の原兎として首相の原敬を狙っているが、やり方は極めて成り行きまかせで、生と死をとりかえてもいいという気魄はぜんぜん感じられない。その原敬を中岡良一が暗殺すると、かねて村木から原敬暗殺の計画を聞かされていた近藤は「さては村木の奴」と、故郷の丹波から鎌倉の大杉の家に帰り、村木の顔をみるなり「おい、心配したぞ！」という話など昼行灯みたい間の抜けた話である。話は話として主義者村木の琴線をふるわしたのは此の二つの事件だけで、あとは主義者のぬるま湯につかり、講談本をよみながら、時には気の利いた頓智で煙草屋の看板娘をうまく乗せたり、呉服屋になり済ませて勘定取りを追っ払って、主義者たちに笑いの種をふりまきながら、いい気分で生きていたのである。

それがキリストの死を契機とする死の宣告である。果して村木のこの勇氣ある決断は何処から生れてきたのか。村木がキリストの死を知った時点での村木の混乱は、キリストの死が遭難死であるか、自殺であるかのところで動揺しているのであって、自分の死の「方法と時と所」とを確かめたとは云い難い。ではキリストの死体を確認しに行く汽車の中ですか。岩佐、望月、

村木が何を話しながら天城に行ったのか、三人の記述がないので確かようもないが、恐らく村木の心の中では、キリスト自殺説が動かし難い事実となり、キリストの求道的死を悲愴美に高めていたのではあるまいか。そして湯ヶ島の役場でキリストの遺留品を見る。遺留品の品目の記述もなければ、それへの感想も切り棄てている。少くともキリストは画を描きに出掛けたのだ。辞世の句とも云える辞世の画が其処にあったのか、なかったのか。なかったのならまずまず問題は少なく先に進める。しかしあったのに村木がその記述を怠ったとすれば(近藤の「回想」にも遺留品については触れていない)その画がとるに足らぬもの、そのことについて記述すると官憲に差し押えられてしまう思想的な画、第三にその画がキリストの人格を損うもの、つまりキリストらしからぬ画の三通りが考えられる。第一については、それが何如にとるに足らぬ画でも、遺品となればもちやげて記述するのが普通であるのにこれをしていない。それが思想的な画であれば、戦後に出版された近藤の「回想」がそれについて書かない筈がない。とすれば第三の画が残る。そしてその先山をたどって一里半、眼前にキリストの死を見るのであるが、更にその先「追悼」に至る略二、三ヶ月の間に、村木に死の告白をせまる重大な出来ごととは起きていない。故に村木の急激な死への回帰を、キリストの画(なければ幸いである)と死骸に見当をつけるのが理屈にあっているのである。

画はとにかくとして死骸について、村木は「平和な面影」と云い、近藤は「彼らしい美しい死」と云っているが、表現の重さはそのあとに続く村木の「義望の感にたえない」と近藤の「淳朴な村人によって親切に葬られたこと」にかかっているから意味深重なのだ。つまりここが臭いところなのだ。

此処でキリストの足跡をたどるために、猫越峠を中心にした地図を頭に入れておくのも無

駄ではあるまい。

猫越峠は湯ヶ島上り四〇分猫越金山口上り一時間二〇分猫越峠の中伊豆口、松崎上り四時間五〇分宮ヶ原上り一時間二〇分猫越峠の西伊豆口（近藤の「回想」では宮ヶ原を天城の南麓としてあるが、宮ヶ原は標高六、七百米の天城山系にあり、位置としては西伊豆に属する。）茶店の老婆が生きてるキリストを見た最後の人で、手掛りとしては重要であるが、村木たちは湯ヶ島の役場から略一里半山に入ったところで、キリストの死体を見ているから、村木たちが茶店の老婆に話を聞いたとすると、村木たちは猫越峠を越えて宮ヶ原まで降りなければならぬ。そんな予備が彼らにあったらうか。村木たちの記述がないので断定することは出来ないが、九十九%村木たちは峠を越えていない。私は昭和三十一年一月、猫越峠を中心に約二十日ロケーションをしているので、此の地方の天候地勢に割と委しいつもりだ。キリストが一月二十一日の雪の降る夕刻、宮ヶ原から猫越峠に向って歩き出したというなら、これはまさに自殺に等しい行為である。昼でも太陽がなければガタブルである。まして夜、道など分る筈がない。もう一つの道は旧天城峠から約一時間五十分、尾根づたいに猫越峠に至る登山道で、起点は南伊豆の湯ヶ野である。

南伊豆は冬でも暖かい。朝夕は多少冷え込むが、あとは浅い春のようだ。キリストは屈託なく歩いた。画は何も描いてない。昨日稲取の鼻でキャンパスを立て、青い海をにらんでいたら、行商の呉服屋が寄って来て、ついついそ奴の話につられて画はやめにしてしまった。話というのは伊豆の女たちの話だ。そいつによると、ここあたりの女はみんなそ奴のお手がついていることになる。それが病みつきになって、未だに行商人から立ち上れないと云うからたいした男だ。伊豆の女を引っかけろコツは手にあるという。成程そ奴の手は華奢に出来ている。

お店にいと荷造りやら何やらで指が太くなる。太くなって荒くれたらここいらの漁師と同じで駄目だそうだ。僕の手も画描きやさんだけあって労働者の手でないから見込み充分で、今晚やってみないかとニヤツと笑う。僕は結構ですというしかない。それ以上は僕に関係のないことだ。伊豆の女に引かれちゃ男もすたと、そいつはあっさり引きさがつた。そいつのおかげで旅は賑やかだったし、夜はそいつの懇意の家に泊めて貰った。出てきたのは六十を過ぎた女だった。

今日は朝くらいうちそ奴と別れた。下田の女郎相手に商いするから一緒に来ないかと云ったが、僕には南伊豆がまぶしすぎる。

僕は天城トンネルを抜け湯ヶ島、修善寺に出、明日か明後日には東京に帰ろうと思った。村木にはああ云って出て来たが、矢張り二十四日の幸徳記念日には出るのがスジだろう。

湯ヶ野から少しゆくと旧天城街道の立札があった。僕は本街道をそれて、その道に入っていた。今日も天気がいい。青い空に細い覚束ない雲がかかり、落葉樹をぬいて赤松が気持よく伸び、さびた朱色の木肌に僕はそっと触ってみる。それから友人の肩を叩くようにぼんぼんと木肌を叩き大きな声で笑う。広い気分になる。朽ちた落葉を踏むあの手ごたえのなさも僕には楽しい。画を描く隙もないくらいに楽しい。こうなると重い画架を持ち歩いているのが馬鹿みたいだ。素人は汽車賃や宿賃を惜んで矢鱈にキャンパスを拡げるが、あれでは碌な画は描けないし、どうしてもってという気持が……いやよその人のことを云うのは止めよう。此処ではよその人のことを考えるのは止めにしといた筈だ。とにかく画を描きに出掛けて来たからと云って、画を描いて帰らなければならぬというキメはないのだ。それが僕の方法だ。

旧天城峠についた。真っ直ぐそのまま下れば湯ヶ野からの本街道に出るが、余り気分がいい

のでしばらく尾根づたいに歩く気になって、左に入る小道に踏み込んだ。小さな山が右左に見え、あるところに来ると急に視界がひらけ、湯ヶ野や河津浜の向うにきらきら光る海が見えた。梅干の入った握り飯を喰いながら鳶の飛ぶ姿を飽かずながめた。どの位ぶらついたのか滑川という峠に出た。そしてその峠を越えた時、僕の身体はぶるぶる震えた。

「やったあ……」僕は思わず叫んだ。

全山これ雪である。

厚い灰色の雲の中で、キリストは息を殺して画架を立てた。

雪山を見るキリストの眼に光があった。

すると油の乗った絵の具が筆の先ですべった。

キリストの身体から魂が抜け、筆は手に引きずられて進んだ。

夕方の太陽が雲を突き抜けて一瞬輝いたと思うと、雪が降って来、キリストの額で雪となつて流れ出す頃、画は終った。

キリストの眼から忸怩たる涙があふれ出した。

画は密画だった。

キリストは手で顔を覆い、大声で泣きながらも来たみちを駆け出した。二百米も走った時、キリストはあの画をそのままにしておいてはいけないと思いつて帰した。雪山の中に、着乱れて殆んど裸に近い男と女が戯れていた。キリストは泣いていなかった。今度は怒ってい

た。片方の手にこぶしを握り、片方の手をそれに添え、爪先立って背伸びをすると手を高く挙げ、天から画布めがけて拳を打ちおろした。画は真ん中に大きな穴を開けて転がった。キリストは画を引たくると、穴の中に手を肩まで入れ、ぐるぐる腕をまわしながら雪山に向って走った。背丈程もある熊笹の上に積った雪が飛び散った。キリストは腕から画を抜くと、谷を目がけて画を抛り上げた。画は高く宙に舞い、そのいまわしい穴からどす暗い雲がしばらく吹き出し、やがて谷に落ちていった。

雪山に踏跟としたキリストの足あとが、猫越峠を越えて続く。夜がキリストの動きをとめ、凍えるような寒さがやって来た。キリストは雪の中にうずくまり神の裁きを待った。キリストはまさか死ぬとは思っていなかった。自分の身体に降り積る雪が罪を浄め、明日の朝日と共にもう一度主義者の道を歩むものと思っていた。それ迄の間、彼は寒さと一緒にいることは出来なかった。彼はとうとう神を求めた。神に祈った。無駄と知りながら、彼は少しでも寒さが和らぐことを神に祈ったのだが、無駄でも祈らずにいられたなかった。幸徳や渡辺や村木のことを想ったが、神を想い出す程長く彼らを想い出すことは出来なかった。棄てたつものものを再び拾いあげなければならぬ苦渋をも彼は神に祈った。それはキリストにとって最悪のことだった。

キリストが露ほども死を思わなかったところに神のおとし穴があった。キリストが神に尻を向けて祈っている間に、つまり見当違いの祈りをしている間に、神は極悪非道なやり方でキリストの背後からキリストを急襲した。神を信じたが故に、神を知らぬ者とは比べものにならぬくらいの罰がキリストに加えられた。

キリストはもがき死にした。キリストがうずくまっていた地点から十米四方にわたって雪が蹴散らされ、重く沈み、赤い血が雪ににじんでいた。顔には自分の手でかきむしった数条の深い

傷あとがあり、左手中指の爪がはがれ、腕にも擦り傷があった。衣服は殆んど引きちぎったらしく、下半身は裸だった。雪山の遭難者が、眠ったまま幸福に凍え死んでゆくのは似ても似つかぬ残酷な凍死だった。

粗朶小屋の粗朶をどけて坐棺が置いてあった。蓋をとると白いシートが死体にかかっている。岩佐がシートを引くと、真っ裸の死体があった。三人は固唾をのんだ。背を屈め首を下に向けているので顔は見えなかった。むらむらと来た村木が役場の吏員をにらむと、

「裸で死んでいたんです。衣類は滅茶滅茶に破れています。着せようがなかったんです。着せたつもりで棺の中に入れておきました。どうぞ死体を確認して下さい。」

と云った。すかさず葬儀屋らしい男が進み出て、片手を死体の頭に片手を顎の下に入れ、両足をふんばって首を起そうとした。村木は骨の折れる音を覚悟して歯をくいしばった。

「可憐だからそのまま死体をもちやげて下さい。」岩佐が口をはさんだ。

葬儀屋はもう一人の男の手を借りて死体を引きずり上げた。三人は下からのぞき込むようにその顔を見た。キリストの死に顔をスケッチするつもり望月が、思わずスケッチブックを落した。

「確かに久板です。」岩佐が立ち合いの警官に云った。キリストは又坐棺の中にずり落ちた。非道いもんだ……村木の気持だった。

棺は二、三人の男に担がれて湯ヶ島の焼場に向った。(近藤の「回想」では其処で焼いたとあるが、山の中で火は焚けない。適当な広さの河原もない筈だ)村木は発見者の山番にも一度

画やキャンパスのことについて念を押した。役場にあったものが遺留品の全部だ、山番の答えは同じだった。たかがキリストの画で山番が嘘をつく筈もないが、ならキリストは何時、何処で、どうして画を捨てたのか。好きで好きでたまらず(だから二人して北風会を作った)、お互いの気心を十二分に知り尽している筈のキリストにも、村木の窺い知ることの出来ぬ秘密があったのだ。棺の中でゆれているキリストを見つめながら、村木は遂にその秘密を探しあぐねた。云わばそれは、「死者の心」と呼ぶしか仕方があるまい。

村木は男たちに一壘買った。男たちが飲んでいると、村の衆が一人二人と寄って来、二十人ばかりの数となった。村木は又酒を買った。格別用のある人たちではなかった。村木は持って来た殆んど金の男たちの日当と酒のためにつかってしまった。ふるまいはキリストの供養にもならない気がした。此の男たちがキリストやキリストの主義を理解する日は永遠に来ないだろうと思った。此の男たちは生れてから死ぬまで、仮令死んでもキリストとは無縁な人たちだと思った。村木はくたびれ果てた。

「労働運動」に出す久板の追悼文の締切日が過ぎていた。大杉は既に「久板の生活」という想い出を書いている。しかし村木は書けなかった。村木にも窺い知ることの出来ぬキリストの秘密が村木の邪魔をした。村木の想念はキリストの無惨な死に顔に釘付けにされ、過去に遡ることとも、未来に展開することも出来なかった。幸徳の死に顔に主義者の死を觀る青年の客氣を村木は既に失っていた。好きな人として極めて日常的な心情から、自分と同一化して考えていたキリストが、その秘密からまぎれもない隣人と知って、改めてキリストへの愛の形態に迷ってしまった。裏切られた愛と片付けるにはキリストへも氣の毒だったし、村木自身の人から

も許せなかった。

村木は運動社を出た。帝大の農学部横から不忍池に降り、大きく浅草にまわった。目的はなかった。歩いているうちにはキリストの死に顔から解放されるかも知れないと思った。六区から観音堂の裏に出、花川戸を突っ切って吉原に出た。昼の剽客相手に女が煙草を吸って立っていた。しばらく彼は見返り柳の柵に凭れて女を見ていたが、急に女に近付くと西方寺の在りかを聞いた。女は別に厭な顔もせず、日本堤のつつきの方を顎をしゃくって示した。

通称「土手の道哲」の西方寺は所謂投げ込み寺で、死んだ遊女のあと始末をよくしたという道哲のことは、渡辺の三角二階に出入りしていた新内の岡本文弥から聞いていたので、村木は一度は行ってみたいと思っていた。投げ込み寺につながる話はいろ江戸時代のことだから、村木にとっては遠い遠い夢のような伝説にすぎないが、早桶につめ込まれ、暗い奈落に次々に抛り込まれた遊女のなきがらのあとは、こんもり盛り上った土饅頭となって、心もとなげな春の陽を受けて白く光っている。村木はしゃがみ込んで煙草を一本つけた。吉原の煙草を吸っていた女の顔が浮んだ。村木はもう一本煙草に火をつけると、土饅頭の上に置いた。それから彼はもうなにもせず墓を見ていた。遊女が歌った唄も、遊女が書いた手紙も、遊女がつけていた櫛も、着物も、草履もなかった。遊女の肉と骨とが盛り上げた土だけがあつた。いつまで見ても倦きなかった。

彼は以前にも同じような恰好で墓を見ていた記憶がある。それは淀橋の正春寺にある菅野須賀子の墓である。一堆の土饅頭に塔婆が一本立っていた。寝転べばそのまま墓を枕に午睡が出来そうな墓だった。

それもこれも女の末路のあわれさをよそに、何とも味のある墓が出来上っていた。京都に帰

ったキリストとは別に、彼は猫越峠にキリストの土饅頭を盛ろうと思った。画の謎も、一月二十四日と四十六歳の暗い符節も、幸徳、渡辺に殉じた主義者の崇高な死の思念も、静かな顔も劇しい顔も、自殺も事故死も、すべての推理は生きているものの遊びである。眼鏡と靴と、キリストの残したものはそれだけである。それを猫越の土饅頭に埋めてやろう……そして

「……次は俺の番だ。」

村木は突然そう思った。肝臓がきりきり痛んできた。村木は顔をしかめ、油汗をたらたら流しながら、懷から原稿紙をとり出すと追悼文を書き始めた。俺の番だ、只それしきのことだ。土饅頭が一つふえるだけだ。

それは「死」は順番に過ぎないのだ。

しかし村木の死は順番通りにはゆかなかつた。翌大正十二年六月、高尾平兵衛が殺され、九月大杉が殺された。二人共死に顔がなかった。高尾の顔はまるまると太って別人のようであり、大杉の顔は縋帯でぐるぐる巻にされていた。村木は自分がどんな顔の順番に当たるだろうかと思つた。しかしそれは順番の先頭に立っていた村木が、あとから来た人たちに突き飛ばされ転がされたばやきでもある。

マコよ、独りで泣くのはおよし

僕も一緒に泣かしておくれ

パパに好く似た大きなお目に

露を宿して歎歎く時は

僕も一緒に泣かしてをくれ。

パパとママが帰らぬ事を
僕が寢床で話したをりも

マコよ お前は頷くばかり

涙見せない可憐さまに

僕は腸絶つ思ひ。

パパのよく云った戯言に

俺が死んでも

ゲンニイ居れば

マコは安心

大きくなる と

マコよ 今日から好い小父様が

パパの代りにお前と遊ぶ。

マコよ 独りで泣くのはおよし

小さいお胸に大きな悩み

秘めて憂ひの子にならぬよう

僕も一緒に泣かしておくれ。

村木の古田大次郎や中浜哲との接触が次第に劇しくなって行った。大正も終りの頃である。

本書は、故近藤憲二氏の編になる『獄窓から』（改造文庫版・昭和五年初版発行）を復刻したのですが、読みやすくするため、新漢字、新かなづかいにいたしました。

巻末の、秋山 清氏の「解説」と鈴木清順氏の「物語村木源次郎」は、本書発行にあたって、新たに書き下していただいたものです。

獄窓から

一九七二年九月十五日 第一刷発行
著者 和田久太郎
発行所 幻燈社
東京都中野区弥生町2の31の4
電話 (三八四) 五四〇三
定価 九〇〇円

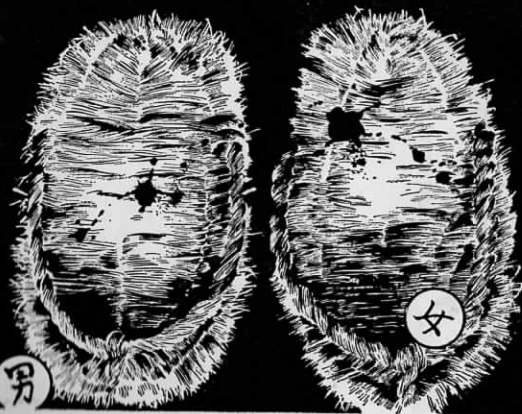
落丁・乱丁本はお取替えいたします

遊俠一匹

加藤泰の世界

- 加藤泰映画のステール集 ■ 加藤泰エッセイ集 ■ 加藤泰インタビュー ■ 藤 純子インタビュー ■ 脚本『荒神山』 ■ 加藤泰全作品 記録とその回想 ■ 絵コンテや写真多数
- 加藤泰論 ■
- 鳴りひびく挽歌のしらべ 桶谷秀昭
- アナーキストの追う夢に近く 石堂淑朗
- お竜さん、夢のかけ橋 吉増剛造
- 理想主義 その痛ましき魂と抒情 権藤 晋
- 憤怒とやさしさ、凝視の闘い 山根貞男
- 編集＝山根貞男
- 林静一による挿画・装幀
- A5判・424頁
- 定価 1500円（送料 100円）

静一画



ろまん 夢

林静一詩画集

B5判・八〇頁・多色刷多装
特製箱入・著者肉筆名入り
限定一三〇〇部・一八〇〇円
（十〇〇円）



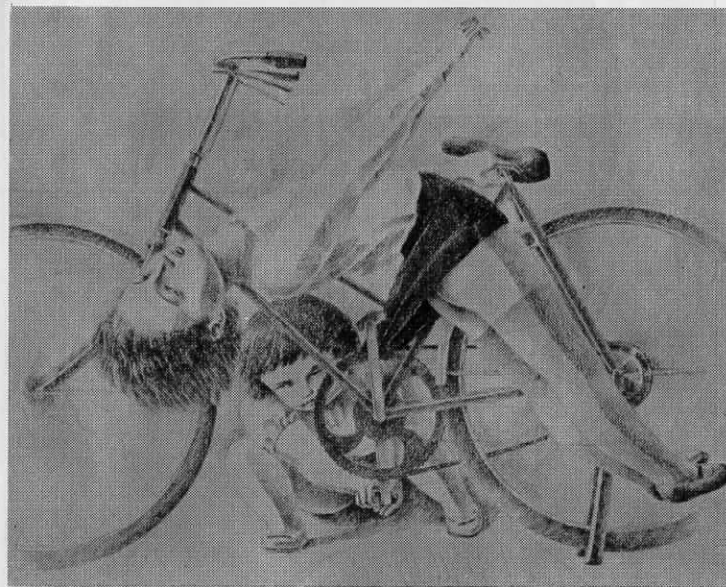
静画



紅犯花

林静一による書下し 異色絵物画集

A5判・一七〇頁・八八〇円（三二〇〇円）



片山健画帖 **エンゼルアワー** 限定 1000 部 A 4 判・1,700円(千100)